原著

幼児期における Death Learning の試論

―発達教育学的視点の試み―

牧　正興 *　坂田　和子 *　馬場　恵里香 **　下稲　美里 **

Attempt of Death Learning Program in Infant Child
－ Searching for the Development Science on Education －

Seiko MAKI, Kazuko SAKATA, Erika BABA and Misato SHIMOINE

概　要

本研究は、もともと青年期における諸問題の予防的アプローチとして Death Education Program を導入するための導入時期について検討することを目的としてきた。基礎的調査として幼児期の子どもを持つ保護者に対しての実態調査を行い、子どもへ死を伝えることの必要性を確認した。その内容に基づき保育現場において Death Study Program の導入のための実践を行い、死の概念形成、認知発達を中心に、種々側面から検討した。その結果、研究Ⅰでは、死について子どもに伝える必要性は感じるものの、そのほとんどが非現実的な説明に終始していることが明らかとなった。この結果を受け、研究Ⅱでは、３、４、５歳児に対する絵本を用いた実践的研究を試みたが、全年齢児において死に関する諸要因の上昇傾向がみられた。また、研究Ⅲでは、見て、触れて等の具体的・体験的方法を導入したところ、年齢を重ねるごとに死のイメージが安定してくることが明らかとなった。とはいえ、これら全ての結果が安定的なものとは言い難く、導入への可能性・必要性は確認することができたため、発達教育学的視点から考察を加えた。

キーワード：Death Learning、幼児期、発達教育学

はじめに

本研究は、筆者が 2001 年、スクールカウンセラー制度が始まって間もなくその対象中学校で起きた生徒の自殺を経験したことに始まる（牧，2004）。当時よく社会問題とされていたいじめ自殺（今なお解決に至っているわけではないが）の可能性としてさまざまな調査が行われたが、その可能性は当人の日常的行動を鑑み、全面的に否定された。まさに発作的としか言いようのないものであった。このような原因不明ともいうべき若者の自死の例は多々報告されている。発達的視点からは､思春期、青年期の特異的混乱であることは疑う余地はないが、この防止にはそれぞれの発達期に応じた教育的営みが必要であろう。

確かにこれまでも性教育や道徳教育の中でそれなりの配慮は行われてきた。にもかかわらず、現状は効果的であったとは言い難い。その原因としては、以下の 2 点に集約できよう。①一般的に死の概念形成は概ね 7 ～ 8 歳で可能となると言われるが、概念の細かな内容の形成は個々の生活経験のあり方により異なるであろう。もし、この時期に性教育や生命教育のなかで死の問題を取り扱ったとしても、概念形成後であれば、その受け止め方は千差万別で、その限りは、目標とする一貫した教育効果は達成できないであろう。となると、②死の概念形成を日常生活の経験を通してより確実なものにするためには、ただその時期（年齢）を待つのではなく、「それ以前（幼児期）」に、どのような内容の経験が意味を持つのかを吟味する必要がある。

以上のことから、幼児期における死の概念発達に関する先行研究を再吟味し、かつ、確実で効果的な概念形成とはどのようなものであるかを積極的に追求していく必要がある。そこで、我々がこれまで行ってきた実践的研究の一部を紹介し、かつ、これら一連の研究の動機でもあった、特に青年期の自殺予防とともに、より良い生き方について探求することにある。そもそも本研究の目的は、青年期の自殺予防や正しい命の尊厳を学び取ることにある。そのために、死の概念が確立する以前にどのような概念（内容）を形成するかを問うものである。そのために確立以前に幼児期へのアプローチを試み、具体的でより良き概念を形成するための教育的プログラムとは

*福岡女学院大学
**福岡女学院大学大学院

何かを模索することで、実用性のあるプログラムを創造することにある。それ故、これらの一連の実践的研究は、現実性のある主題を求めるなか、Death Education から Death Study そして Death Learning へと変遷していったことも付記しておく。

もともと一般的となっていた Death Education は Deeken,A.（1986）により「人間らしい尊厳に満ちたしと生を全うするためには、誰もが必ず直面しなければならない死に対する相応しい準備が不可欠である」と、その意味内容に即して「死の準備教育」と訳され使用されてきた。現在では米国を中心に、相互に学び合うという観点から Death Study が定着している。しかしこれらも、死そのものを学ぶ（例えば死とは何か、等）ことに誤解されることから、われわれは Death Learning として位置づけることとした（神田 他 2012）。

子どもの死の概念についての研究は、1930 年代から始まり、最も代表的なものとして Nagy（1948）の研究がある。ブタペスト周辺に住む 3 から 13 歳の 378 人を対象として死の概念の発達的研究を行い、以下の 3 段階に分類している。① 5 歳以下の子どもは、死を可逆性に考え、死の中に生を見ている。② 5 ～ 9 歳の子どもは、死を擬人化することが多く、死を偶然の出来事として考える。③ 9 歳以上なると、子どもは死を大人と同じように、自然法則により起るものと考えている。Speece & Brent（1984）は、子どもの死の概念の研究 35 篇について、普遍性、体の機能停止、非可逆生の理解年齢を調べ、5 歳から 7 歳に理解が可能となることを明らかにした。さらに、子どもの死の理解は他の発達と独立して存在するのではなく、総合的な認知発達とともに、遂げられると述べている。

本邦における類似の先行研究には、仲村（1994）や杉本（2000）そして小澤（2002）があり、なかでも仲村は、3 ～ 5 歳で 11%の子どもが死を考えるとし、死の普遍性についての理解が芽生えることを示唆している。また、死の非可逆性については、3 歳で 5 割の子どもがある程度の理解を示すことを明らかにしている。臨床的視点からも、杉本らは予後不良の 3 歳児が、死の不安を死の不安を言葉で表現したことを報告している。さらに、小澤（2002）は、死についての認識が未熟な幼少児たちの方が、ありのままを受け入れることが出来やすく、少なくとも大人たちが“タブー”と感じさせない関わりを持つことが必要であると結論付けている。

これらの研究結果は、本研究への積極的な方向づけを示唆するものであり、それをどのように具体化するかが問われるところでもあうことから、以下にその実践的研究を紹介する。

研究 I

上記の課題の基盤的研究として幼児期における本プログラムの導入期およびその可能性を検討することにあった。

方法

対象：福岡・佐賀県内の 6 幼稚園（公立　1 園、私立 5 園）に通う 3 ～ 6 歳の子どもをもつ保護者 404 名（母親 397 名、父親 6 名、祖母 1 名）であった。

質問紙：園の設置主体ならびに教育方針、さらに家庭における信仰宗教が本研究に影響を与えることを踏まえ、幼稚園用と保護者用の質問紙を作成した。

結果：調査対象とした幼稚園の設置主体は、キリスト教系 2 園（回答総数 137）、仏教系 2 園（回答総数 85）、宗教と無関係 2 園（回答総数 181）であり、そのうち明確な信仰宗教があると回答した保護者は全体の 20.0%であった。

<u>生命の大切さを子どもに伝える必要性について</u>

5 件法による質問で、「そのことを強く感じる」は、4.5 ± 0.7 であった。そのきっかけとしては、①自らの経験から②子どもの行動を見て③社会での出来事からであった。

<u>死について子どもに伝える必要性について</u>

5 件法による質問の結果、4.1 ± 0.8 であった。死に際する子どもへの説明は、実際に見て触れての体験型、寿命の説明、死について説明する説明型などがあったが、多くは天国へ行った、お星さまになった、などの話的説明しており、その説明に困惑している姿が浮き彫りになった。

<u>子どもへの説明</u>

結果的には、説明の初期には現実的な説明をしているものの、最終的には非現実的説明をしている割合が高く（64.8%）、現実的説明が可能な保護者は約 1/3（35.2%）であった。

これらの結果から、高い割合で死について子どもに伝える必要と感じながらも、実際には現実的な説明で伝えきれていないことが明らかとなった。

研究 II

目的：これらの結果をもとに、死に関する絵本の読み聞かせにより、3 歳～ 5 歳の幼児期における実施前後の死の認知的変化を検証するとともに、その可能性について検討することにある。

方法：保育園児を対象（3 歳児 15 名、4 歳児 19 名、5 歳児 29 名　合計 63 名）に統制群法により実施した。

Death Study の手続きは、収集した日本児童図書出版協会が推薦する死に関する絵本 32 冊の中から光岡らの分類法をもとに、6 冊を選定した。読み聞かせの手続きおよび認知測定は図 1 に示す。

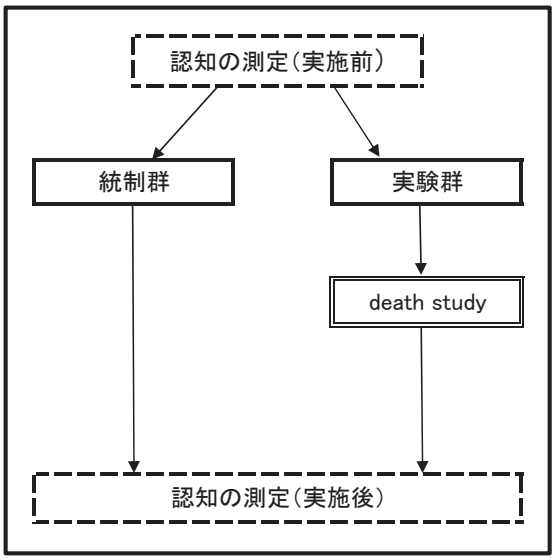

図１　調査方法の過程

読み聞かせは、実験群の幼児に週１回、約 15 分行った。調査期間は 2007 年７月～ 12 月までの約６か月間であった。

結果：実験群における全項目で、年齢間の特別な変化（効果）は見られなかったが、実験前後において統制群に比べ全項目で上昇傾向が確認され、なかでも感情項目において顕著な変化が見られた（表 1）。

表１　全年齢の実験群における実施前後の平均値

	前	後		
呼吸	0.77	0.89	↗	
感覚	0.23	0.34	↗	
思考	0.69	0.77	↗	
感情	0.77	0.89	↗	*
非可逆性	0.74	0.83	↗	
普遍	0.49	0.51	↗	

研究Ⅲ

目的：本研究では、研究Ⅱで得られた結果に基づき、定期的に Death Study を実施することにより、不安や恐怖を伴うことなく死の認識を深め、より自然な形で死を学ぶことを課題とし、よりリアルな形での絵本の読み聞かせや体験型 Death Study を取り入れ実施した。子どもの概念形成はもとより、本発達期の課題でもあり、かつ Death Study において、その中心となるアニミズム残存状況について検討する。

方法:調査対象は保育園児、3 歳児 20 名、4 歳児 20 名、5 歳児 26 名の計 66 名。うち実施群は、ランダムに選出した各年齢 10 の 10 名、計 30 名である。

実施群は各年齢幼児に週１～２回、絵本の読み聞かせと体験型 study（20 分× 3）を行った。

絵本の読み聞かせ

絵本６冊を選出。うち、これまでの研究を通して特に反応（発話、指さし）が多かった『ミッフィのおばちゃん』については擬人化されたうさぎを人の書き換え、紙芝居的に使用した。

体験型 study

植物：切り花を使用『生→枯れる』過程を体験する。見て、嗅いで、触れてを体験する。また、聴診器を使用し、自らの心音、人形や机、玩具等の身近な無生物の音を聞く。補足的に、植物や人の成長をカードにより確認した。また、Death Study 実施前後に質問紙（表 2）による調査を行った。

表２　質問紙の項目

１．アニミズムの残存状況 ①イヌ②ヒコウキ③ぬいぐるみ④クルマ⑤キ⑥ハナ⑦イシ⑧ヒトについて　写真を提示し、提示物の確認を行ったうえで回答を求めた。
２．体の機能停止 「死んだ人は息をするかな？」（呼吸） 「死んだ人は叩かれると痛いかな？」（感覚） 「死んだ人は考えるかな？」（思考） 「死んだ人は泣いたり、笑ったりするかな？」（感情）と教示
３．不可逆性 「死んだ人は生き返ることができるかな？」と教示
４．普遍性 「自分もいつかは死ぬかな？」と教示
５．死のイメージ 顔の表情カード①喜び②悲しみ③猪狩④驚きを提示（図２）し、選択

図２　顔の表情カード

結果：本研究で課題としたアニミズムの残存状況では、実施前後の主効果で傾向性が見られたが、実施群・非実施群、交互作用においては有意な差は見られなかった。さらに各年齢比較を行ったところ、実施前後、群別の主効果は見られず、交互作用は5%水準で有意であった。加えて単純主効果の検定では、実施群の前後で有意な差は見られなかった（表3）。

表３　群別・実施前後の２要因分散分析

		前	後	
		MEAN (SD)	MEAN (SD)	
3歳児	実施群	3.63 (0.84)	3.60 (0.85)	
	非実施群	2.93 (1.03)	3.18 (1.14)	
4歳児	実施群	3.50 (0.87)	4.29 (1.43)	→ *
	非実施群	4.11 (0.69)	3.68 (0.88)	
5歳児	実施群	4.24 (1.17)	4.57 (0.88)	
	非実施群	4.33 (1.25)	4.69 (1.01)	

$p<.05^{*}$

ほか、からだの機能停止、普遍性においては明らかな差・変化は見られず、不可逆性の交互作用において傾向性が見られた。

表示カードによる死のイメージ：3歳児は固定化されたイメージはなく、逆に喜びが最も高い割合（全体の約33%）を占めていた。それに代わって、4歳児は悲しみ（全体の約40%）、ないしは無回答・その他（全体の約40%）であり、死に対するイメージが安定しつつあることが示唆された。5歳児では約70%が悲しいと回答し、本年齢をもって概ね安定することが確認できた。

まとめ・考察：

研究Ⅰの結果から、幼児期の子どもを持つ保護者たちは、高い割合で子どもに死を伝える必要があると感じていることが明らかとなった。しかしその一方で、実際には現実的な説明では伝え切れていないことが明らかとなった。確かに“死”という概念やこの事実を子どもに伝えることについては、その説明の困難さから概ね童話的な説明に終始していることが明らかとなった。しかし、真実を隠せば、子どもが納得するような作り事を作り上げなければならないし、隠そうとしても子どもは気付いてしまう。

両親を亡くした子どもたちが集まるアメリカのターギーセンターのディレクターは、2・3歳の子どもでもお菓子の隠し場所はすぐに見つけることや、子どもが環境にとても敏感なこと、大人が隠しても実は子どものほうで既に知っていて親を困らせないために知らないふりをしているということを述べている。また、身近な人との死別体験の有無がその後の死への態度に明確な差をもたらすのは児童期までであること（丹下、2004）、さらに死の概念の発達は児童期になるとある程度固定化され、死へのあこがれが見られるようになること（仲村、1994）などが確認されており、教育・保育のなかでどのような死の概念を形成させるかが重要な課題であるとした。

そこで第Ⅱ研究では、保育現場で子どもにとって最も身近な絵本を題材として具体的なプログラムを導入し、実験的方法により、主に認知発達的側面から検証を行った。その結果、実施前後の実験群、統制群間に有意な差は認められなかった。しかし、実験群の平均値からは、概ね理解が進んでいくことが伺われた。このことから、Speece & Brent（1984）が結論している死の概念としての普遍性、体の機能停止、非可逆性等の理解は5歳から7歳にかけて形成されるとしているが、本研究結果からは3歳から5歳にかけてもゆっくりと進んでいくことが示唆された。同時に、幼児期には各項目で着実な伸びが見られ、死を自然な形で自分の中に取り込み、違和感なく受け止め、認識を深めていく事がことが確認された（岸・坂田・牧　2009）。

このことを受け、研究Ⅲでは死の概念形成、なかでもアニミズムの残存状況について検討し、今後のDeath Studyの可能性について確認することを目的とした。その結果、アニミズムの残存状況に関して、4歳児のみに実験群の前後で有意に差が見られた。4歳という認知発達そのものが不安定な時期ともいえるがゆえに、Death Studyの介入によって「生きているもの」か「生きていないもの」の識別がより確かなものとなったと思われる。生物・無生物について身近なものの理解が促進されたことが示唆された。そのほか体の機能停止、普遍性、不可逆性、等については質問段階での言語理解等の限界があり、今後の検討課題となる。

これら一連の研究から、幼児期は認知や概念形成過程においては当然のことながら不安定ではあるが、その形成過程だからこそその提示、保育・教育レベルでの質的吟味は十分なされなければならないことが示唆された。このことからも発達教育学的視点からの接近が重要な課題となる。

死の概念形成という視点においても、単にその時期を待つというよりも、その形成過程（幼児期）に的確な刺激と学習課程が保障されることによって、その可能性は広がるものと考えられる。

引用・参考文献

1）牧正興　2004　悲嘆への援助二例―子どもの事故死と自殺から―福岡女学院大学大学院紀要「臨床心理学」（創刊号）51-55

2）牧正興・坂田和子 2005　幼児期のDeath Education Program作成に向けての基本的課題　福岡女学院大学紀要　人間関係学部　2　53-58

3）坂田和子・牧正興　2005　Death Education　Programの導入時期に関する検討　福岡女学院大学紀要　人間関係学部　2　23-28

4）宮本裕子（アルフォンス・デーケン 編）　1986　幼児教育

と両親の役割　死への準備教育　第１巻　メヂカルフレンド社　p.64-82.
５）神田春奈・松永恵里奈・中津濱瑠美・坂田和子・牧正興 2012 幼児期における Death Learning の可能性（5）福岡女学院大学大学院紀要「臨床心理学」9 25-30
６）Nagy, M. H. 1948 The child's theories concerning death. Journal of Genetic Psychology, 73, 3-27
７）仲村照子　1994　子どもの死の概念　発達心理学研究 561-71
８）杉本陽子　2000　慢性疾患患児と健康児「生きている実感」と「死の衝動」 発達人間学論叢　4. 37-52
９）Speece, M. W., and Brent, S. B. 1984 Children's Understanding of Death: A Review of Three Components of a Death Concept. *Child Development*, 55, 1671-1686
10）丹下智香子　2004　青年前期・中期における死に対する態度の変化　発達心理学研究，15 (1)，65-76.
11）岡田洋子　1990　学童期にある小児の死の概念発達に関わる要因の検討―認知的発達と社会的経験に焦点をあてて―　天使女子短期大学紀要　11，21-35
12）岡田洋子　1988　病児の「生と死」に関する意識調査　小児看護　1523-1533
13）ディック・ブルーナ作・かどのえいこ訳　2005　ミッフィーのおばあちゃん　講談
14）岸法子・坂田和子・牧正興　2009　幼児期における Death Study の可能性について　6　61-68
15）澤井敦　2000　現代日本の死生観と社会構造（上）　人間関係学研究（大妻女子大学人間関係学部紀要）1（創刊号），13-29.
16）岡田洋子　1998　子どもの死の概念　小児看護，21 (11)，1445-1452.
17）筒井真優美　1998　子どもの死をめぐる課題　小児看護，21 (11)，1453-1459.
18）藤井裕治　2002　子どもが考える「死の概念」の発達　ターミナルケア，12 (2)，
19）武田京子　2006　絵本論　ななみ書房
20）阪本一郎　1977 「絵本の研究」 日本文化科学社　140 ～ 148
21）光岡攝子・大村典子・堀井理司・笠柄みどり　2003　絵本の読み聞かせによるデスエデュケーションの試み．小児保健研究，62. 569-575.